

高のよるこびとして、この高原に降り立った。
 ここで少憩、記念写真とこつた後バスに乗り、一旦前
 蘇盆地まで下り、それから竹田を経由しての帰路につい
 た。そして午後八時少し前佐伯に降り着いた。
 参加人員五十一名、快晴で暖かい三日間、見学地ほど
 こもすばらしく、まことに恵まれたよい旅行であった。

記録

佐伯惟治公四百五十年祭

尾高知廟参拝の記

(羽柴記)

大永七年(一五二七年)十一月二十五日、悲劇の人梅牟礼城
 主惟治公が、尾高知の峯で憤死なさって、七ようど四百
 五十年に当る。そこでその終焉の地尾高知廟で、墓前祭
 を催すこととなった。

午前八時、佐伯駅前をスタートした大型バスは、次々
 と参加員を拾い、番五で臼杵からお出での近藤氏夫妻
 を加えて満車、国道十号線を南下した。会員がまず感激
 したことは、はるばる土佐の高知から、佐伯氏の末裔で
 ある細木溪龍氏が、今朝のフエリ一便で加わられたこと
 である。

葛葉から三川内(電済県東臼杵郡北浦新三川内)に向ったバス
 は、まず梅木の光久寺に参拝した。曹洞宗のお寺で、こ
 こに惟治公の位牌がまつられ、古い過去帳があった。前
 もってお願い申しておいたので、松垣住職はまず丁寧に
 惟治公の古びた位牌に、ねんごろな読経をあげられた。

参加していた籠護寺の森本住職も法衣に改めて列座、直
 川村墨淡の願王處の庵主と共に読経、本堂一ぱいの会員
 それに地元梅木の区長さん以下多数参礼、まことににぎ
 やかなものであった。

終って一同は打連れて、すぐ近くの鷲野辰神社に参拝
 する。ここ梅木部落の鎮守で、勿論佐伯惟治公が祭神で
 ある。惟治公がお召しになつて来た直垂があるそうだが
 今日見見するひまがなかった。

一行と、梅木の方々と乗せたバスは、古江峠までのぼ
 り、新しく出来ている林道を一キロ半ほど歩いて、鷲々
 谷に達してそれから谷間の小径を少し走って、尾高知
 廟に達した。

地園には尾高知神社と出ており、りっば女鳥居まであ
 るが、ここは光久寺持ちの惟治公の廟所であり、お霊屋
 の向って右に鎮魂碑、左に墓舞が、風雨にやぶられてい
 て、悲劇の跡をどめめている。

佐伯から携えて来たお華(しきみ二封)を供え、燈明をつ
 けて読経が長々とつづき、そして墓前読経が行われ、境
 内におふれた七十名ばかりの参拝者も、次々と拝礼した。
 ここで思いがけず、梅木の方々のみでなく、地元歌
 系・イヤザメの方々十数名により、酒・焼酎をどのおも
 てなしに接した。四百五十年という歳月の流れの中で、
 よその城主、攻めほろめされた惟治公をまつりつづけて
 来て、今ここに大挙して参拝の佐伯の私共と、敬待して
 下さるお気持ちは、本当にありがたい限りであった。混
 雑の中であつたとはいえ、区長さん外皆さんのお名前も
 とくと承らず、相すまないことであつた。

帰りは元来た道を引きかえしたものが大半で、あとは
 辰根すぢの赤鳥居に出で、豊江・鳥野浦島など北浦の海
 まながめながら、半ばやぶでふさがつた小道を古江峠に
 下った。

おみやげまでいたたいて、地元の方々と別れてバスに
 乗った私どもは、再び三川内を出で七市尾に出る予定を
 変更(坂尾峠を下り大型バスでは無理というので)、国道十号線に

出て少い南にさがり、北川町の瀬口の「お頭神社」に参拝した。

お頭神社は、惟治公ご最期を見届けた家来の一入が、主君の首を敵方に渡すまいとして、その首級をここまで運んで葬ったと伝えられ、今も毎日家来客がとだえないう。

それにしては、私共が大挙して参拝、尾高知の廟所でおまつり、どのようなに惟治公の霊がおよるこび下さつたことか。
榊原社の古城址のそびゆる限り、軍記・伝承のある限り、依伯十社・宇目四社の氏神のまつられる限り、いつまでも尾高知に参拝する人は絶えないう。(終)

新年度の予告

大友宗麟の

新しい墓を訪ねる(案)

—津久見市へ年頭初歩き—

去る十月二日、津久見市

の大友宗麟の

墓が見事に改修された。大分マリン・パレス上田社長

によるもので、今度は壮大な大理石の藩葬型で、はじめてキリシタン大船にふさわしいものである。

そのほかいろいろ訪ねたので、次のようにな立祭した。多教会員のご参加と希望する。

日時 昭和五十三年一月二日(月)

集合 出発 午前九時五十分 依伯取集會

依伯取集會上り 九時五十分

津久見駅着 一〇時三十分

訪問先

① 大友宗麟の墓(境内に銅像あり)

② 西教寺(住職は本会委員)

秋月橋門縁故の寺で、橋門先

生の文書あり、拝見したい。

ここでお茶をいいたき昼食。

④ 長泉寺・赤八幡を経て青江へ

⑤ 増村家訪問

戦後「依伯紳士史」と開拓して各

著は、今も我々と指導してくれてい

る。墓参したい。

⑥ 解脱閣寺

家道に県南に珍らしい仏足石あり。

柘水にとらえてもらって如何。

帰り 津久見駅 発下り 午後二時三十分

(又は午後五時三十分でもよい、自由)

其他 昼食(各自携行) 汽車賃 自弁

当日降雨の節は空三日

申込 不要、家来・友人の同行可

女は、一般会員に、この誌上での予告、来る十

七日の年末役員会にかけて決定するが、ほほこの

通りになる見込み。

なおこの外の見学一例は津久見港の大観、セ

メント工場、麻石山、駅近くのウバメガシの巨木など

時間があれば随所でご加えたい。その外別の

ものあればご提案ありたい。

新年度役員会

昭和五十三年度(一月十一日)に、史
談会はどのように働くか——

とき、昭和五十三年一月七日

内容 研修計画・事業計画・予算決
定・とくに二十周年記念行事を

佐伯史談会

聚足満二十周年の記念行事

佐伯史談会は、昭和三十三年三月十六日

鶴岡紳士史研究会が主催してスタートし

た。最初の会長は柴田南華、土屋直己老

まだ健在で、顧問に推された。両氏ははじめ

創立に尽力した衣瀬武夫、高野忠次助そ

の外今はほとんど故人、左が一人泉由蔵が

福岡県に健在である。(敬教と貴路)

発会の会場は龍護寺であった。

その後十周年の記念行事も、昭和四十五

年に盛大にやっていた。二十周年はさらに

有意義に祝いたいものである。